母子通園施設の原型と任務

先日、 障害児の母子通園施設運営法人の現場スタッフ研修会で「行動観察と記録のとり方」をテーマに、講話する機会を得た。

実は４０年程前の学生時代に、今の母子通園施設の先駆けである母子の集りと係わっていただけに、何だか里帰りし、昔の仲間と再会したような感慨を抱きながら話させていただいた。

あの時代、全く何の社会的支援がない中で、何人かの母親たちが肩を寄せ合う集りで、我々学生が子どもの遊び相手や母親の話を聴いたりしていた。
更に、在仙の各大学生や社会人にも呼びかけ、「重症心身障害児のためのボランティアの会」を作り、家庭訪問するホームヘルパー活動も行っていた。

振り返えれば、あの頃は行政人も含め、誰彼なく会う人に「ボランティアって、何？」、「ホームヘルパーって、何？」と聞かれ、正に今の種々多彩なボランティア活動、ヘルパー制度のハシリであったと思う。
この母親たちの集いが今の重症児を守る会の原点であり、その活動が宮城県に重症児施設誘致へと繋がった。

一方、母子の集いへの理解・協力者が現れ、恒常的な場として「マザーズホーム」が設立され、今の心身障害児通園事業へと繋がった出発点でもあった。
母子が肩を寄せ合うところから初期には「マザーズホーム」と呼ばれたが、法的な事業整備に伴い障害児への療育活動が事業の主目的になったことから、施設名称も変わったきた経緯がある。
この出発点となった施設が、後々、法人格を得て今では市内に５ケ所の母子通園施設を運営している。

子どもの療育活動はもちろんのことだが、まずは親子で前向きに生きていく勇気が生まれるように支援をすることが、こうした母子通園施設の原型であり、かつ、任務でもあることを、横道に逸れながらも少し触れた。

後日、あるスタッフから、次のようなメール（抜粋）をいただいた。
【　現場に長くいらした先生ならではの説得力のあるお話しに、大きく頷いたり、大いに反省させられたりと、気持ちのふり幅も大きく振れさせられた２時間で、回転の遅い私の頭では、全てを消化するには時間がかかりそうです（横道のお話しも引き込まれる内容ばかりでした）。
ぜひ、２回目、３回目と続けてご指導頂きたいと思っております。 】

阿部幸泰　　（2007 年 5 月 26 日　記）